

### 日本語読み上げソフト 「フォーカストーク Ver 2.0」



スカイフィッシュが開発した日本語読み上げソフト  
「フォーカストーク Ver 2.0」

# 開発者たち

とちぎ・企業のチカラ

・ファイル 9

スカイフィッシュ

大塚 雅永さん(40)

ドアを開けると、部屋の中は真っ暗だった。「電気が必要です。おね、つけてください。暗闇の中から声がした。大塚雅永さん『おは、その時思った。これが、彼らが二十四時間過して居る世界か』

「自分ができるとは思わなかった。大塚さんは、国や県が出資する第三セクター、ソフトウェアの開発者だ。二〇〇四年三月、米マイシシステムワリユーシヨシエンクロン社がロサンゼルスとちぎ(SOCT)で開いた視覚障害者のための技術サポートセンターに参加した時のことだった。同社の技術サポート担当、細田也さん(まこ)がパソコンを利用する際の音声でサポートするが、細田也さん(まこ)が「日本語読み上げソフト」が高度に発達した、盲を製品化した実績があった。だが採算性がわからず、ホテルに戻り、夕食に誘われたと細田さんの部屋を訪れた時、気がかまれた。「分かるつもりになっていった。情報をお瞬時に得られるようになった。一方で、健常者と障害者の情報格差は広がっていた。」

「情報のバリアフリーを指さなければ」

〇五年七月、決意胸に、SOCTを去った。

退社から一カ月。いきなりソフトウェアの巨人「RPA」をたいた。東京の日本マイクロソフト社行き、熱い思いをぶつけた。その相手が細田さん

## 情報もバリアフリー

## マイクロソフトの支援受け

んだ。

「ビスタ対応のソフトをつくりたい」

同社が新たに開発するOS「ウィンドウズ7」を「ビスタ」向けの、新しい日本語読み上げソフト。実現には、同社の技術支援が不可欠だった。

常職を履す提案も行った。

「発案日はビスタと同じに『先ずから』

従来の視覚障害者向けソフトは、完成したOSを基にソフトを開発するため、OS発売からしばらくたって店頭に並ぶのが普通だった。

「同時開発します」

後日、細田さんから返答があった。

「米本社から『応援してやれ』と言われました。熱意は通じた。」

同年九月には、ソフト開発・販売会社「スカイフィッシュ」(宇都宮市御幸ヶ原)を創業。理念に共鳴したSOCT時代の仲間が五人集まり、ソフト開発に没頭した。

米マイクロソフト本社も二度訪れた。「ベンチャー

フォーカストークは、例



事務所で社員と打ち合わせする大塚さん(右から2人目)。30歳前後の若い仲間とともに、既成概念を打ち破った

企業にこそまて情報開示するのは異例です。同社に掲載されたニュースを読み上げられる。音声の感情表現の豊かさや、メールにお利用できることなどが好評で、月百本程度を売り上げるヒット商品となった。

有言実行。〇七年一月三十日、ビスタと同時に新製品「視力が衰えてきた母親に『視力が衰えてきた母親に買ってもらった』」が発表された。自購入者から喜びの声を聞くと、大塚さんは「自分の考えは間違っていない」と実感する。

スカイフィッシュは「空中を浮遊する謎の生物から名付けた」という。

「既成概念を打ち破る」社名に込めた思いが一つ表現した。

(山根茂生)